

<b>Title</b>	自我論と人格主体論の現象学的再考(第 III 部 (1)) : 社会福祉の人間観の要諦における深化的考察
<b>Author(s)</b>	牛津, 信忠
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 第 27 巻第 1 号, 2014.10 : 79-99
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=5080">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=5080</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈原著論文〉

## 自我論と人格主体論の現象学的再考〔第Ⅲ部(1)〕

——社会福祉的人間観の要諦における深化的考察——

牛 津 信 忠

### 抄 録

シェーラー・M. は、共感の本質について述べた箇所、「共同感情は人間愛を基底づける、人間愛は人格と神に対する無宇宙論的愛を基底づける」としている。この認識は共感における自我論上の見解から人格論へ至る彼の思想をよく表している。われわれはこのシェーラーの認識を軸心にして考察を進める。それによって、共感感情によるトポス形成から人格的次元におけるトポス形成に至るまでのトポスに内在する相互包摂状況の展開について、この第Ⅲ部で問うことにする。それは真の世界開放性へ向かう道程の解明でもある。この議論の展開において、これまでも参照してきたシェーラーの「形式主義」の議論をもとにしながら、われわれの議論の内実を形成していくことにする。特に、「形式主義」の価値論の考察や幸福主義の問題をさらに詳細に検証していく。こうした考察によって人間と社会における相互包摂と志向意識の展開が分離的同一性(ないし矛盾的同一性)を持ちながら明らかにされていく。その道程の解明は具体的トポス形成の場として本稿におけるこれまでの論理展開の主たる領域としてきた社会福祉(広義)の領域に即して述べられていく。こうして、まさに相互包摂と志向性が展開されるトポスにおける「具体としての福祉」への途の連続的動態が本稿で明らかにされることになる。

キーワード；自我，人格主体，志向性，連続性，位相幾何学

第Ⅲ部(1) 相互包摂と志向意識の展開——トポス形成から展開へ

第8章 人格主体と自我の相互性における場の構築——相互浸透から高揚へ

第9章 社会福祉的な場の形成とトポス論——自我から始まる主体化の位相的な条件設定

以下は次号の論叢に掲載予定

第10章 社会福祉的人間観——間主観性の段階性(自我～人格主体～秘奥世界へ)

結章 福祉的人格主体論——エンパワーからリカバーへと進む主体

## 第8章 人格主体と自我の相互性における場の構築——相互浸透から高揚へ

社会福祉的な場を考察するにあたって、人間がそこに生きている対象化される「環境や自然世界」と対象化されない「心的世界」との相互性を問うことが必須となる。そうした問いを発するなかで、前述してきたシェーラー, M. (Sheler, Max) の説く内容が再度想起される。それは彼の人間学における自我と人格の理論である。自我は対象化される人間の側面であり、人間は自我上の意識によって環境ないし自然を対象化する。この自我に対して統合という作用によって関わり、この自我を統合作用によって包摂するのがシェーラーのいう人格ないし人格主体である。

さらに前述してきた議論を用いて再確認を試みるならば、人格は、一定の統合体として把握可能な固定した存在ではない。人格は作用であり、絶えず動的である。したがってその内にある統合性は上位の人格主体によってさらに統合されることによって存立を可とすると理解される。人格の統合性という作用面は、さらなる人格の主体面によって統合されることを前提に主体として位置づけられているとするならば、そこにいう統合作用とは主体存在の媒体作用としてのみ捉えられる。そうした媒体作用としての統合性によって、人間存在における人格性は、自我領域との相互連関を維持しつつ個性的自我と個性的人格をその相互浸透性の持続のなかに形成していくと考えることができる。さらにいうならば、人格の段階的高揚（以下に詳述）のもとに、人間存在は世界へ向かうパースペクティブを持って自我領域の存続がある限り生の持続を可とされる。その生は、曲折を前提にしながらも人格主体の高揚のなかに位置づけられる。自我主体は、この人格主体のもとにあってその主体性を維持していくことができる。しかし、自我は完全なる主体とはいえ人格にとっては客的存在に留まる<sup>(1)</sup>。

さて、人格の段階的高揚についての議論を深めるため、シェーラーの人格論をベースにした愛についての論述から始めていく。

シェーラーは、愛を論じた箇所では、ディルタイ (Dilthey, Wilhelm) によるヘーゲルの愛についての議論を取り上げ、ヘーゲル (Hegel, G. W. Friedrich) が「全体性への感覚」という認識のもとで愛を捉えている、また「愛は生けるものの感情であり、愛するものは生けるものとして一つである」とする点に注視している。こうした言説を通じて、彼は、愛を全体のなかの一部といった部分的な存在上の関係性では捉えることができないことを主張するのである<sup>(2)</sup>。

このようにシェーラーは個的かつ部分的に存立する愛についての理解を廃し、「自由、独立及び個性を（このように）与え受容することが『愛』にとって本質的である」としている。また「一体感から次第に再び浮上してくる二人の異なった人格の意識は、愛において、現象の中に明確、鮮明に形作られる」としている。こうして愛とは「共同感情に比べてはるかに人格的、自由、自立的、かつ自発的」である。また「際立って志向的である」とする<sup>(3)</sup>。

それとともに、シェーラーは、愛に関連して、共同感情を以下のように深い次元より解き明かしていこうとする。「一体感は追感得を基底づける」、またこの「追感得は共同感情を基底づける」、さ

らに「共同感情は人間愛を基底づける」と説く。この共同感情とは、「相互的感得」と「(共に) 共同感情を持つ」という二形式がある、とシェーラーはいう<sup>(4)</sup>。さらに人間主義や博愛主義などの現代の人間愛と「キリスト教においてはじめて登場した、神におけるすべての(任意の) 隣人の精神的人格に対するあの無宇宙的愛」の本質的な相違を直視して、「人間愛」のなかにおける本質愛「普遍的人間愛」「神における愛」は「人格及び神に対する無宇宙的な愛」「神への愛」を基底づけるとする<sup>(5)</sup>。「特殊な生命自我とその実在的基体並びに類としての人間の生きた心は、存在的にみれば、単にノエシス的作用をその実現に際して実在的に制約する人間における精神的人格の下部構造であり、同時に、この人格中枢の『道具』であこと」にその根拠を持つ。また次のようにもいう。「一人の主体を人格として愛することが可能となるためには、それ自身において個体化されている精神的人格中枢一般が人間性の中に全体として存在し満ち溢れていなければならない。」即ち「普遍的人間愛がなければならない」<sup>(6)</sup>。キリスト教にいう精神的人格的愛たるあらゆる人々の個体的人格中枢に対する愛もその場所と範囲は普遍的人間愛によって示される。すなわち「普遍的人間愛」は、「人間に対する神の先行する愛」=「神における愛」の存在によって「制約されたものとして体験され思惟されている限り、神への愛にとってもまた本質的条件となる」のである<sup>(7)</sup>。

ところで、上述の議論は「志向的でかつ認知的なすべての情緒的作用と機能を包括する力」たる「心情の本質的な諸力」、またその価値を形象化して「愛の秩序」の基底づけという法則的認識をすることによって人間存在の内実としての本質条件を位置づけ、内容把握したものに他ならない。さらに、シェーラーは「可能な限りの理想的に完全な人間性が人間において獲得さるべき」であるという前提に立つとすれば「心情のまったく異なる種類の諸力が……そのすべてにわたって陶冶されなければならない」と述べている。なぜなら「一つの確定した基底付けの秩序が情緒的な諸作用と諸機能との間に現存している」からであり、そうでなければ陶冶の段階を高揚できないからである<sup>(8)</sup>。

われわれがこの章の表題に掲げる「自我と人格主体の相互性の場」ということに関する思索は、まさにこうした心情の基底づけ法則の実在によって明らかにされていくことになる。

そのような理解の内実に分け入り、形而上の彼方への飛翔、ないし宗教的垂直的な愛の降臨というような内容に終始することなく、シェーラーの説くところを詳細に分析的に理解していくことにする。それは理解の次元で把握可能な本質現象の解明である。すなわち個体的人格中枢に対する愛＝普遍的人間愛と「神における愛」との、条件的制約のもとにあるものの、連続的存立を可能とする存在の本質がそこにはある。そこにいう条件とは、上記の「精神的人格中枢一般が人間性の中に全体として存在し満ち溢れる」ことによって生じ来る。これは、シェーラーによるキリスト教理解、人格の存在の中心における「積極的浄福」が「魂の救済」の「本質契機」になる、という思想にも通じる<sup>(9)</sup>。彼は「人が苦痛と不幸をなおも受けはするがそれにもかかわらず浄福に受苦しうる途を示したことは、キリスト教の生命理論のなしとげた偉大な改革であった」としている。ここに

いう苦とは、「私たちの存在のその都度のより深い層へ私たちを向ける」「機能の表現」と理解されている。すなわちより存在の深い層へ向かうなかで「浄福なかたちで受苦する」「十字架を浄福に引き受ける」ことが表現されている<sup>(10)</sup>。これはまさに神における愛の表現であり、「精神的人格中枢」が「人間性の内に充満する」豊かな人間愛からのさらなる究極への途がそこには示されている。ここには福祉論として表現されてきた思想の本質が息づいているのであり、われわれは、この本質還元を福祉論という制約を思考に課しながらも進むことになる。

その志向性の追求と帰結への途については、われわれの事象を貫く連続性の思想、さらにはそれを支援の技術として具体化し実践する各様の福祉実践思想の概要について触れた後に再度述べていくことにする。

ここでは、社会福祉の究極目的とされる「全人的人間の統合的人格の確立」(嶋田啓一郎)という希求性のプロセスのなかに示される人間福祉の果てしない実践たる福祉志向の連続の営みが、上記の存在上の本質還元における軸芯を表現していることを確認するに止めておく。

そこに示唆される「人格の確立」とされる内容をシェーラー流に表現すると、すなわち個的人格、総体人格、秘奥人格という人格の階層に応じ自我性と他我との間主観が、またそれぞれの階層内における人格主体間の間主観が、さらには階層内・階層間における自我性と人格主体間の間主観が各様の形態をもって相互包摂の場を形成してゆくプロセスが見えてくる。それは決して固定した堅固な人格という形を持つものではない。それに終始するならばそれは自我領域に止まる人格性でしかないことになる。さらに、その相互包摂の場とは、まさに人格的高度化のなかにおいて、「精神的人格中枢一般が人間性の中に全体として存在し満ち溢れる」トポス状況への歩みの場所を意味するとのみいうことになるであろう。

ところで、シェーラーへの一般的な批判点として触れてきたように、彼の人格論と自我論とは二元的に理解される。その理論上の把握のあり方、われわれの理解について度々言及してきた。自我論の位置づけから見ると人格論は見ることもしたがって操作することもできない形而上の位置を持つ。しかし人格の作用たる統合性の観点からは統合対象としての自我世界の全てを内に含む一元化が可能となる。この両者をトポス論的に捉えると二者の境界は霧散し、境界なく統合という形で包摂する人格とそれに包摂される自我領域とがあるという図式が成立する。しかしトポスには包摂という作用はあるが、それが一方向的働きであるのみでは、単なる状況説明に終わるのである。そこに人格論的要素を自我からの一貫性を持って組入れてみるときに、志向性が、志向における意味が論点として内包されざるを得ないことに気づくのである。われわれは、前稿においてトポスを論点として把握した、それが何であるかは自我的に選び取られ特定化されるのであろうが、その論点(トポス)によって場の状況(トポス状況)が自在に形作られていく。人格上の論点はその志向性ないし働きの性向を堅固に明確に示している。

その論点とは、前に確認してきたように、人格上のまさに統合性への段階を踏んだプロセスである。そのプロセスを作用状況としてみていけば志向性という性向の存立が明瞭になる。

そこにおける志向とは統合性への動向という本質契機を持つ。この本質契機への帰還が、福祉論上の言葉を用いると、リカバーであり、その契機への力動性を有することがストレングスであり、それが作用として現出するのがエンパワーである。この段階ではエンパワー等の用語をこのように位置づけておく。この議論については、この章でも概説的には触れるもののさらに第10章で詳述される。

以上のような理解に基づくと、自我から人格へと相互浸透的に高揚していくという人間における内的な営みが、福祉領域において適用理解され、その現象が連続的な流れとして明らかにされていく基盤が与えられる。すなわち福祉領域において用いられるこうした用語によって自我領域からの離脱を語り出すことが可能になる。このことがこの段階でも推論できるのであろう。

そうしてその展開方向が志向性の動向としての統合性への途を歩み、まさにそうした意味における高揚という道程が相互浸透というプロセスを辿りつつ、内的個において、個々の間柄において、社会関係において、さらには秘奥の世界への道との間柄においてという形で継続していく。

このような途の基点としてわれわれはこの論考において、数ある場のなかで福祉構築の場を取り上げて自我世界から人格世界への本質的な流れをその具体（ないし実際）において明らかにしているように試みているのである。

その場の構築とはいかなる福祉上の作用の連続・連動によって生まれてゆくのであろうか。それは支援技術上の表面的にみるといかにも大まかと思えない用語による条件設定によってではあるが既に語られている。それは概略列挙していく内部共感的世界としての間主観の真髄に始まり、その関係性におけるいくつかの原則性、特にバイスティックが整理して提示してくれた受容、自立、自己統御、秘密保持、等々の諸原則でもあるとともに、さらにはエンパワー、ストレングス、リカバー、という支援の方向性、またノーマライゼーションやバリアフリー、ユニバーサルデザイン等々、またインクルージョンなどという諸条件設定に関わる用語がわれわれには方向性の内容として提示されているのである。

そこで、次に、ここに示される福祉上の方途、支援の方向性を受けて福祉上の論点を自我次元からつくる場を段階的に辿ってゆき、自我から始まる主体化の条件について、一般的に許容実践されている内容領域に限って究明していくことにしよう。

まず「自我と身体」について、これまでのわれわれの考察を引用しながら段階的な概要把握をしておく。

われわれはこれまでの著作等の参照において、メルロ＝ポンティ（Merleau-Ponty, Maurice）を引きながら、身体と精神の両義的存立と両者の「実存的運動内における絶えざる完遂」について言及してきた<sup>(1)</sup>。そこにいう両者とは「精神と身体の連合」とも表現されている。さらにそれは「身



体図式」という描写的把握に至り「身体の空間的・時間的統一性、相互感覚的統一性、あるいは感覚＝運動的統一性が言わば正当な権利を持っている」ことの表現であるというメルロ＝ポンティの認識にたどり着く。ここにいう「感覚」する主体に踏み込んで考察するとき、二重感覚の論、「触れられる手が触れる手である」との例示で示される「両義体制」「相互的に共感し共存する両者」があるという議論に至る<sup>(12)</sup>。こうした考察に基づいて、そこにある「主体」を問うと、「相互性の中で行為を存続させる内奥にある可能性」として捉えることができる。これはきわめて本質に集約理解された主体の捉え方である。その本質性はシェーラーに帰還して理解を深めるときに相互補完的に把握されうる。シェーラーは「物的身体」とそれをさらに統一的連関のもとに捉える「身体統一性」とを区分している。この統一性としての身体は、「外的知覚の対象となる」「身体物体」と「内的知覚の対象」たる「身体自我の領域」という両者の基底として存立している。こうして身体の物的側面との関係性、それも基底的关系性のもとに自我領域が存立しているという両者の描写のもとに、身体と自我が捉えられる。この両者をさらに統合する主体としてシェーラーは人格を位置づけている<sup>(13)</sup>。これはメルロ＝ポンティが「相互性の中で行為を存続させる内奥にある可能性」として捉えた主体、さらにはその深化的存立体と重なり合うとして理解可能であろう。メルロ＝ポンティがまだ自我領域において捉えようとしていた領域設定を超えて、さらなる世界開放性に向かうときにその自由度の高度化に沿ってシェーラーが説く「人格」が否応無しに浮かび上がってくる。対象化をなし得ない真の主体＝人格主体が見えないままに作用的な現出をみるのである。

自我に発しながら他我に接するという関係性をわれわれは日常的な人間の関係性のなかに見いだすことができる。われわれがここに取り上げる福祉的な人間相互、あるいはワーカー・クライアント関係においても、その発端はこのような自我上の関係性を出発点とする。しかし、この関係性は世界開放性の段階性を経るプロセスのなかで相互的にシェーラーのいう「存在参与」という関係性の遂行へと進んでゆくことが期待されている。これが相互の対象化を乗り越える段階性を伴う主体性、しかも相互主体性への道程である。

ここにいう存在参与という関係構築の途は、ブーバー、M. (Buber, Martin) やマルセル、G. (Marcel, Gabriel) の思想のなかに典型的に見いだすことができる。存在参与とはまさにシェーラーにより人格との関連で語られる関係性形成の本質である<sup>(14)</sup>。既述のように、シェーラーは「行動に作用統一を与える作用中枢」を「人格」とするのであるが、この作用は対象化することができない。しかしそれへと「存在参与」ないし「共遂行」することはできるとしている。われわれは、「(社会福祉における場の究明—共感共同からトポスへ)」においてこの存在参与ないし共遂行を可能にする人格関係において真の「共感 (empathy)」が成立することを説いた<sup>(15)</sup>。人格的な共遂行による統合性のなかにおいて、自我上の感情的な次元、他我との関係性を形成されていくということになる。その自我上の関係性はさらに人格関係を高度化させる条件たる可能性を身体的土台として齎すことになる。こうして自我と人格との相互浸透から高揚へ、ある場合には、相互対決を通して

の相互浸透から高揚への可能性が辿られることになる。この途は、これまで絶えず言及した曲折を経ることを前提としており、決して直線的道程でないことはいうまでもない。

われわれは、こうして存在参与や共遂行という行為の連続性のなかで、自我から人格への途を描き出すことができる。これは見えない道筋ながらも持続可能な道程である。われわれがこの論考において一定の制約条件としてその内側で論を展開してきている福祉上の実践という枠組みにおいては、この存在参与ないし共遂行という行為指針が、人間における人格へ近接していく道筋となる。

福祉論上における人間の主体化の条件、人格主体への関係構築の道があるとすれば、この存在参与を出発の開始点とする意外にない。それは何らかの内なる志向性を起点とし発せられてゆく作用に他ならない。自我から見えない人格への途はあるいは真の主体への途は、このような歩みだしの行為の連続として描かれる。そのような果てしない途の一步から始まる参与とは、先に示した、福祉上の実践技術のなかにその具体が示されている。先に述べたバイスティックの原則、さらには実践の留意事項でもあるストレングス、エンパワメント、リカバー等を想起すると良い。

このような条件的方向付けをベースにして、次章においては、より一層社会福祉上の現実在即して実践上の媒介項となる諸事を念頭に置きながら、自我から人格に至る連続的状况を構造的にも作用的にも理解できるような諸相ならびに諸概念を明らかにしていくことにする。

それはトポス論に関連する議論、すなわちこれまで内容に踏み込むことなく示唆的既述に止めてきたトポロジーないし位相論に関わる議論の展開を主軸にして連続的の存立に関する考察を展開していくことにする。

## 第9章 社会福祉的な場の形成とトポス論——自我から始まる主体化の位相的な条件設定

第8章を受けて、存在参与による相互包摂の場における関係構築のプロセスに視点を当て、存在参与や共遂行を促進していくあり方を支援技術のなかで応用していく方途の基礎考察について、その論理上の前提内容を明瞭にしていくことにする。

自我から心情の階層を辿り、それを通じて人格に至る諸相、諸論点、諸状況、諸構成を福祉領域において明らかにしていく。それは人格という段階への途、すなわち主体化の条件を探っていく試みである。そこにシェーラーによって科学的に解き明かすことができるとされた世界とそれを越えたところからの統合作用の伝達を可とする主体の領域との連関性の流れが具体のなかで、より一層明らかにされていく。

さらにそこに示されていく状況は、状況包括的に高揚していく人間の存在性の根底とさらに社会存在において見いだすことのできる間主観的状况そのものであり、その高揚のなかで実現していく個的人格主体の相互性は、総体人格主体の相互性、さらには秘奥人格主体における相互性といった間主観性の深化的拡大のプロセスと各相互性の複合的相互性といった相互包摂の広がりという具体的現実を表出していく。そこには、エンパワー（内発力の発揚）やリカバー（人格的実質への帰還）



への道として表現可能な状況内的作用を見いだしていくことができる。それは、間主観性の作用力のなかに、さらにその中核としての人格の各階層における作用力のなかに、まずエンパワーメントとして発見され、その継続による各主体それ自身の本質への帰還という意味を持つリカバーへと続くのである。

前に述べられた「西田の理論」(特に第Ⅱ部の(2)における)は、最初の自我人格領域を極限にいたるまで明瞭に「場所論」として説明することには成功している、といえる。彼の説くところによると、対象化できない領域、極限に於いて「真の無の場所」<sup>(1)</sup>に至るという議論が展開されている。すなわち、「知覚作用が成り立つ」そうした無の場所が、「更に無に於いてある」。そこにある無が「真の無」としての想定された「絶対無」である、と説かれている。その無の場所において、「判断作用が成立する」と考えられている。

彼の見方によると、人間についての自我的観点の延長の極限において無我という自我領域を越えた広がりの説明をしようとしたと考えることができる。これは自我に比すと他の世界領域とも見える。自我領域を越えた世界を無として、その究極に「真の無」が存立する。この自我の延長線上にあるかに思えながら、目にすることができない世界が表現されている。フィヒテ(Fichte, Johann Gottlieb)流の思考を加味して捉えると、「通徹(Durch)」によってそこにあると理解できる世界とも見える。すなわち見られる限りは矛盾し合うが、「それが生きられている限りは、……生ける統一を形成する」事態が在るのであり、現状況とその連続上の彼方との通徹がそこにはあるべくしてある。それは「生ける統一」としての人格領域と自我領域との矛盾的同時的存立、さらに両者の相互包摂がある、とする理解に類似する。

西田のいう無とは特殊化された状況として理解される世界領域である。さらに理解を深めていくと、それは、宗教的作用としての無と理解することも可能である。さらに自我領域とこの宗教的領域とは「有」と「無」という相互に矛盾的な存立状況にありながら、究極的次元では相互的存立を可とする。すなわち、相互矛盾的な存立体でありながら、矛盾的同一体として連関する途を持っており、それぞれが相互浸透し合うという構図にも達していく。すなわち対象化の世界から非対象性の世界への飛翔が相互浸透を経ながらの統一へ至る構図を、われわれはここに把握することができる<sup>(16)</sup>。この西田の議論(およびそのわれわれなりの理解)は、いまだ未完成であり、おぼろげに描かれたに過ぎない。西田の論に対して新田が言うように「現代の問いとしての西田哲学」という視点でさらに問われる必要がある。

われわれの視点からする「無」や上述の論点との比較検討の詳述は別稿に譲り、以下においては西田の言う前述の議論に述べておいた主語述語の関係を、われわれの主体論と対比する作業のみに焦点を当てて触れておく。この議論は上述の矛盾的合一論、相互性論を解き明かすヒントを提供してくれる。

われわれの世界における自我主体を包括する場は多様な領域に分割される；言語的コミュニケーション領域、個的存在の人格関係の場、社会的世界、物質世界、さらに宇宙等々。しかし、われわれはここで、この一方向性に疑念を抱かねばならない。上述した2つの領域（意識的自我世界とそれを包摂する世界）ないし場所は、個々における生活の（あるいは生きている存在性の）基点から、周囲世界を包摂しつつ同時にそれに包摂され世界開放性へ向かう可能性のなかに置かれている。しかし、この自我領域と周囲世界という二者の関係性は、現在のそこに生じる相互包摂以前において、意識の目覚めとその内容をなす「自他未分化の体験流」を起点にして基本的に人間の自己（我）から出発する。そうした現実のなかで、自己周辺の述語の一般化のもとで主語的統合を図り、主語的自我存在が限界領域までの述語的一般世界に包括される状況が拡大していくプロセスがある。その述語的世界は「述語となって決して主語とならない」「対象化されない」一般の極限に至る。この極限に「無」がある、とされる<sup>(17)</sup>。

人間の自我状況の表面化において、主語—述語の関係性が、自己周辺の述語の一般化のなかにあって主語的統合が図られる。われわれは、自我存在が極限までの述語的一般世界に包摂される状況拡大があることに容易には気づかない。われわれは、これを看過してしまう。しかし、極限たる無との間のプロセスにおける自我世界と述語の一般化の間には多くの相互関係が存在している。発端からの歩みのなかで西田のいう無の状態へ至るプロセスには、多くの自我状況との相互関係を把握できる。それは、「述語となって主語」とならない対象化に至ることのない「真の無」という場まで続く。西田流にいうと以上のように表現されるであろう。

われわれの自我においてある主観的な存在は述語的意識界によって包括される。加えて、間主観的な、しかも絶えず両義性の不確かさのなかにある志向性によって、次の個人的な自己同一性、社会的同一性そして宗教的な統一性が、前者の自我的主体を包括する可能性を与えられている。われわれは、この統一性ないし統合性の自我への包摂的働きを人格とするのである。人格のそれぞれの階層には、横の関係性ととともに、志向性を前提として縦の関係性が形作られる。このようにみえてみると、人間の存在がIという自我上の主語を中心に据える部分と、上述人格主体との相互作用、間主観関係から成り立っていることを知ることができる。これについて、われわれは、「生（なま）の存在」から本質把握へ向かうとする志向性を見いだすことができるのみである。これが人間の世界の実質的な位置、Toposの状況把握そのものである。トポス状況（場所）は、その核としての論点（基点）、トポスそのものとの一体的関係性から形成されているといえる。

その核とは、人間の関係性という領域に限っていえば、人格主体の作用内実（統合性）それ自体であるといえる。その作用基軸が、一定次元の述語と主語の自我的な包摂関係を間主観の道を辿り、層をなしながら包み込んでゆき、さらにそうした客観的な包括性を、志向的人格の統合性によって包括していくというプロセスを辿りながら、存在の高次化が齎されていく。しかし、無条件の高次

元化はあり得ない。そこにある間主観の相互性が何らかの整合化への核として現象世界に開かれてあるいは閉じられて存立していることが絶えず想起さるべきであろう。そうした開かれたあるいは閉じられたトポスの特性が世界への志向性を決定する。

こうした志向性の継続を辿っていくと、そのプロセスを解明するためには、自我から始まる主体化の位相的な条件設定の解明に繋がる考察を経なければならない。

このような視点から見たときに、現在の一般的にみられる福祉理論上の主体性論はどのように把握され、位置づけられているといえるであろうか。結論からいえば、それは場の理論の述語的側面からの理解に即しながら、そこに関わる主語的特殊化を自我論上の在り方に限るという内容に終止している。そこには人格主体の統合性へ到る道程が掻き消され、主体への道程、ないし真の主体へ至るまでの思索が希薄であるという傾向を見逃すことはできない。

以上、われわれの視点から自我上の世界から人格へ至る途に見えてくる矛盾的合一の作用状況について説いてきたが、従来、自我世界を離れ、シェーラー流にいう対象化をなし得ない「人格領域」「人格主体」を説くことは問題視されてきた、このことには何度も触れた。これまでの議論に加え、さらにその批判点を掘り下げるためにいくつかの論を取り上げておく。その一例として、ヴァイトクス(Vai'tkus, Steven)の主張を垣間見ておく。彼は社会集団に関する著書に於いて、ギュルヴィツチ(Gurwitsch, Aron)の「客観世界についての検証されていない形而上学的な人類学的仮定」等とする批判点を取り上げ、シェーラーの形而上学的側面を浮き彫りにし、彼の説に対して手厳しい<sup>(18)</sup>。さらにはシュッツ(Shutz, Alfred)による「シェーラーの相対的な現実世界についての概念は、社会的集団の基礎的、共有的、文化的形態を除外して関係を問う傾向があり、その構成員が相対的な現実世界についての共通な観点を分け持っていて、にもかかわらずその他の様相を分有することなく、さらにこれを知ることがないという事実を説明していないという限界を持つ。」<sup>(19)</sup>という主張を取り上げて、シェーラーの相対的なままに放置され本質解明に至ることなく形而上の議論に主要論点をゆだねているかに見える論理展開を批判する。

しかし、こうした批判的見解への応答をわれわれは度々試みてきているのであるが、このような単純な批判的思考のみでは、人間主体、その本源たる人格主体への一面的理解と、したがって人間の主体化と本質に関わる福祉実践においては、一面的対応に終わり、特に人間を総合的に支援しようとする福祉論上の実質的な支援対応に至ることがない。シェーラー流の真の主体としての人格理解に対して否定的立場を取る見解には人間と世界についての理解における偏りを感じざるを得ない。

前述してきたように、人間は自我論上の主体という心理学的対象化を可とする領域にその全体を限る存在では毛頭ない。シェーラー流の対象化できない統合作用としての人格の階層的存立は、個的人格主体、統合的人格主体ないし社会的主体、さらに宗教的人格存在たる秘奥人格として、いか

にも垂直的に舞い降りてくる形而上の世界からの人間把握であるかにみえるが、これを志向性と両義性という現象学的、特にメルロ＝ポンティ流の捉え方で理解していくときに、人間における本質把握へと近接し、見事にその全体を説明することができることに気づくことになる。確かに、シュッツのいうように、シェーラーの議論は、一見、相対的な人間存立をそのままに放置しているかに見える。両義性のままに理解される存在は、そうした傾向を拭い難く持つかに見える。そうして、これに対する答が、自我的存在からの人格存在への存在参与であるとするならば、これのみで論を尽くしたとはいえないであろう。しかし、この存在参与が志向性という、メルロ＝ポンティ流に解された意味におけるパースペクティブを持つ行為として捉えられるときに、人間の存在上の可能性が開かれてくる。

そこには、人間における福祉的論点が、価値前提的に働くことの重要性が見えてくる。もし断絶や終局をそこに選び取るのであれば、存在の開きを選び取るのであれば、この議論はその価値前提の下で、前方あるいは先へと展開することを許されることになる。この価値前提という議論の設定そのものは、確かに現象学にいうあらゆる価値から自由になり、それと隔絶しながら本質還元していこうとする論理の前提を覆す結果を齎すとも見える。しかし、われわれは、本質還元の結果として「存在の開き」を、本質領域に見いだすことができることに着目する。閉じることなく開くための志向性を前提とする論理態度は、方向性の一つを価値として固定化しているかのごとく見えるが、それは固定によって本質還元を一定域に止める前提価値の容認ではなく、むしろ絶えざる開きと還元の継続さえもそこに齎す価値態度の容認であり、真の本質還元を齎すための途にたどり着こうとする意志を意味するのである。それは特にわれわれが考察の領域としている福祉上の人間へのアプローチにおける価値態度として、これまで前提されてきたものと一致している。すなわちそれはいかなる状況にあり、いかなる問題を担っていようと存在の価値があるという価値態度に基づき存在の開きと志向性を許されている人間の存在性の本質への途と共通しているといえる。

さらにもう一点付け加えておくことがある。シェーラーは、確かに、対象化できないといいながらも、その特性をそれぞれの人格類別に分けて位置づけている。それは、作用とはいいいながらも、総体として見えないものを見ていることにならないか。把握できないものを把握していると感じ取れる上述のような人格段階についての各層の分類的な理解であるが、これは人格の作用としてその統合性の働きを、両義性のなかに生きながら、こちらの側から志向性によって実質として感じ取っていくことのできる、また感じ取る毎に前方が開かれていく限りなき志向性の様態、ないし広がりの可能性に他ならない。その可能性と態様が、志向性を前提とする限りにおいて、前方に向かって開示されていく。前方に総体としての作用が、存在の開きの結果として予定される。これはその行為持続の限りにおける存在の開示的態様としてそこに作用連続して在るといえる内容である。

この可能性には絶えず試行錯誤が伴い、それは揺れという形で表現可能である。これは、福祉的生存への志向性を持ち続ける人間存在にとって、換言すれば福祉的人間存在の解明と、その人間存

在が絶えず陥る危険性のある状況のなかで進行していく福祉学上の思索にとって不可欠な視点である。この揺れのなかでの開きという視点は支援技術上においてもきわめて重要である。

以上の見解を基底に置き、われわれが名付ける「相互的人格主義」という人間存在のあり方を人間の自我的相互性からさらにそれを越えたところにある人格的相互性として、これまで試みてきた説述より一層具体的に、浮き彫りにしていく作業を進める。

その作業のためには、これまで触れてきたことであるが、存在の開きに即した連続性についての観点の論理的整備、および福祉上の条件設定、それには、相互主体ないし間主観、福祉的具体においては支援技術、制度政策等、理念上の概念としては、インクルージョン（包摂）等や、それとともに作用連関としての不充足・不調性を充足・調整へ、また主体化の高度化のためのコーディネーション等が必要である。この章の論理的前提に立ち次章においてその相互関係的な考察を詳述していくようにする。

この章では、以下において、位相幾何学との連続性についての詳述を試みる。特に、そのなかで媒介項ないし媒体論と人格と自我の位相的連関と可能性について福祉領域を例にとって探ることにする。多様体統一のための個的集团的志向性の連続、矛盾の同一性、矛盾のなかから新たな状況が生み出されていく可能性が問われることになる。

次章において論じる支援技術において重視されるエンパワー、ストレングス、リカバー、インクルージョン、また政策論上のエンパワーやストレングス、リカバーやインクルージョンにおいても、技術論上および政策上の在り方のなかに連続性を形作ろうとする方向性を内在させている。それぞれの方途は、自我論上の状態を越えて人格的世界に進まねば完結しないものであるが故に、目的行為はそれに向かうことを既に現状況のなかに内在させている。このいま内在し先に実在する連続の有様を通底状況の現実へ至る道として明らかにしていくために、その前提条件となる考察として、位相論的条件設定に注視して論を進めることが必要となる。位相論の議論を経て福祉論上の上記のより具体的な支援方途の意味を問うときに、その福祉実践用語とその内容とがわれわれの自我と人格といった存在性について、特にそれが相互的な同時的存立というような可逆的存在論にとって有意義なものであるということが理解されるであろう。

相互浸透と高揚論を位相論的に理解し、上に列記した支援技術上のキーワードに触れて位置づけた人への対応における方向性の試行プロセスは、われわれがこれまで取り上げてきた位相論に基づく人の関係性や世界に関する理解によって、より一層現実妥当性を持ち理解を深めることができる内容であることが明らかになる。

その考察は、見える自我上の人格から対象化し得ない人格主体へのこれまでの説明に福祉論上の技術および政策論上の議論を交え、より一層の明瞭さをもって理解を進めることを可能にする。

位相的考察の前段として、前に議論してきたメルロ＝ポンティの可逆性の議論をここに福祉に即



して再度触れ、理解を整理しておくことにしよう。

これに加えて後述の福祉実践上の事実認識を述べていくことによって位相連関を具体的に表現することが可能になる。これは通徹の具体化たる過ぎ去った時間でもあり、未来への可能性を内在してもいるとみることができる。例えば、現在、表面的には障がいと見え生活困難の原因であるとされる状況が、実は能力である、さらには障がいを障害としないノーマライゼーションにより、社会構造・機構、環境等の良化、あるいは障害克服が医学等の発展を可能にするということを考慮するならば、現社会実態によって障がい状況が齎す社会貢献力は多大であり、困難とみえた事柄が、実は人間のかつ社会的にも可能性であったということがあり得る。障がいが重度であるほどその克服による医学的、かつ社会的な高度化貢献力は大きく、人間の生き易さを助ける方向性を辿る志向性社会たる福祉社会の開発を助けることになる。さらに専門ワーカーをはじめ、多くの福祉および関連従事者がクライアントにより成長させられる。その行為の遂行という志向性を辿ることにより、広くその問題状況を取り巻く社会と人との存在論上の高揚が与えられる、すなわち相互包摂性の高揚により、相互的存在の高度かつ安定的存立という果実が約束されることになるのである。個々には福祉の原点におけるマイナスとみられる生活問題の原因が、実は大きな社会的メリットであるという可逆性の例示をみることができるのである。

この可逆性としてわれわれが把握できる状況とは、上に述べ、さらにこれまでも度々触れてきた位相幾何学 (topology) 的な思考によって論理的に支えられる作用状況に他ならない。

オイラーの提示するトポロジー等について前述してきたが (Ⅱの(1)参照)、著作としての「トポロジー」については、ガウスの弟子、リスティングが1847年に書物にまとめたという。こうしてトポスの研究、場所の分析、位置の分析としての研究に広がりが見られる。そのトポロジーには、点の組み合わせ、また一般性を持つという特性が指摘され、かくしてそれは連続していく機能の、抽象論としてではあるが、一般性を持った組み合わせという論理的な位置づけを与えられる<sup>(20)</sup>。

こうした点の存立の形状ないし一般的組み合わせが、連続性を持って相関関係 (機能) 的に表現される。この関数をユークリッド空間からの収斂機能に着目しながら、収束する連続機能という作用性向に焦点を当て論理展開したシューベルト H. (Schubert, Horst) の議論に次に触れておくことにする。この連続的な作用性向の議論を参照していくことにより「見える世界から見えない世界へ」の飛翔とされがちな収斂が、その連続のなかで統合性への道を辿り続ける作用連関たる相互性であることが明確さを増していくことになる<sup>(21)</sup>。

シューベルトはユークリッド空間における収束的集中や収束連続機能に触れ、これにはいくつかの収斂概念があることを指摘している。そのなかで、彼は、通常の収斂、同型の収斂、あるいは中間的収斂を取り上げている。位相幾何学の特性たる連続性の概念とは、こうした収斂概念と密接に関わっている。現実的機能というものは、その機能が集中を収斂的集中とするすべての収斂的集中の定立領域に対応する、また対応する場合のみにおいて、位相的連続が生じていくのである。彼は

こうした収斂と連続の概念に関心を寄せて考察していく。そうして、二者を包摂する概念構造へと歩を進める。そうした集合の各様のあり方を構成する諸要素をみていくと、いかなる専門用語によっても固定した特性を付加されない諸特質からなるものであることが解る、としている。そうした集合の諸点を構成するのは、任意の他の集合であるかまたはある他の数学的対象となるものを位置づける関数である。しかしながらユークリッド的空間の特性たる集合には示唆的な例示が推奨される。収斂を取り扱うにあたり、人は点  $x$  が点  $y$  に十分に近接するということを意味的に実現していかなければならない。ここでは、ユークリッド空間そのものにおいてと同様に、配列に距離概念が不可欠となる。シュールベルトは、近接ということは数値的に正確でなければならないと指摘した上で、 $X$  は特別な集合、 $X$  における点  $x$  と点  $y$  の距離  $d(x, y)$  を形成し定式化する<sup>(22)</sup>。続けて、近傍の公理体系といくつかの同等な公理体系に言及していく。同時にユークリッド空間内の点的集合理論としてよく知られたさまざまな基礎概念を導入する。まず近傍への対応体系よりも明瞭である開かれた集合の公理体系が導入される。これは、こうした叙述に先立って彼が「開かれた集合」の叙述箇所<sup>(23)</sup>で提示した概念である。すなわち、その「開かれた集合」の概念とはユークリッド空間といかなる未整合をもなく位置づけられるものであり、 $Q$  に関するすべての点  $x$  が、 $Q$  に内包される  $x$  の  $e^-$  近傍を有するのであれば、距離空間  $X$  の部分的組み合わせ  $Q$  は開かれた  $Q$  であり、すべての  $Q$  の点の近傍であるか、あるいはそのように表現できる。このことは次のような定義付けから導かれる。すなわち、 $X$  の空の部分結合はそれが点を内包しないが  $X$  である限りにおいて開かれてい<sup>(24)</sup>る。

しかしこの公理体系は非常に弱いといえる。それはいまだ収斂についての満足のいく概念とはいえず、後の数値的概念拡大をなすという困難な道を残している。それでも著者が自信を持っているように連続についての有効な概念導入を可能にするには十分な概念形成になっている。彼は事前に定立した「開かれた集合の概念」をもとに議論を展開するのであるが、それは距離空間における「開かれた集合」という内容を持つ。したがって、そこにおいては作用的に存在する近傍について問わねばならないことになる<sup>(25)</sup>。

点  $X$  の近傍は次のような条件を充足する。1)  $X$  の近傍のすべての部分的組み合わせは  $X$  の近傍である。2)  $x$  の近傍の限界数値の共通部分は  $X$  の近傍である。3)  $X$  の近傍すべては、 $X$  を内包する。4) もし  $U$  が  $X$  の近傍であるならば、 $U$  が  $V$  のすべての点の近傍であるような  $X$  の近傍  $V$  が存在することになる<sup>(26)</sup>。

こうした考察に続いて、閉じられた集合が対象とされる。 $A$  の補集合  $A^c$  内の諸点はそれらが近傍となる特性によって性格づけられる。

それらは  $A$  の外的な諸点と呼ぶことができる。 $X$  の他のすべての点はその近傍のすべてが  $A$  と出会う、すなわち  $A$  と空虚な交わりをするということはない。 $A$  とその諸点の関係諸点である点の

集合は  $A$  の境界点とされる。かくして  $A$  の境界は  $\bar{A} \cap \bar{A}^\alpha$  となる。またそれは  $A^\alpha$  の境界でもある。それは閉じられた集合である。境界点  $A$  は  $A$  に所属しないことに気づかされる。 $X$  の諸点は  $A$  に関係する 3 類型に分類される；内的諸点，外的諸点， $A$  の境界上の諸点。 $A$  の内的点と境界点は  $A$  の関係点である<sup>(27)</sup>。

彼のいう連続性の概念に焦点を合わせてみることにしよう。 $X$  と  $Y$  をユークリッド空間また  $f: X \rightarrow Y$  を  $Y$  に向かう  $X$  の位置設定とする。多様かつ統合的な算定においては、連続性について次のような概念を設定できる。 $f$  は、もし任意に  $f(x)$  の  $\varepsilon^-$  近傍  $U(f(x); \varepsilon)$  を所与とするならば、 $\delta^-$  近傍  $U(x; \delta)$ 、それは  $f(x)$  の  $\varepsilon^-$  近傍に位置づけられ、 $f(U(x; \delta)) \subset U(f(x); \varepsilon)$  となる。この定義は、 $X$  と  $Y$  が任意の距離空間であるときに保持される<sup>(28)</sup>。

またそれは次のようにも換言することができる。 $f(x)$  の任意  $\varepsilon^-$  近傍である逆関数  $f^{-1}(U(f(x); \varepsilon))$  は、 $X$  の近傍である。それ故に、 $f(x)$  の任意の近傍である  $V$  の逆関数は、 $X$  の近傍になることになる。それは  $V$  に  $f(x)$  の  $\varepsilon^-$  近傍 逆関数イメージを含むがごとくとなる。かくしてわれわれは連続性の概念の一般化へと到達していくことになる<sup>(29)</sup>。

数学的な構造を形作る  $X$  と  $Y$  の現実化された形態は、構造を形成する束  $X$  が束  $Y$  の上に逆単一価値を持って存在するとするならば、二者は主要な相違を持つとは考えられないといえる。こうした幾何学的構造においては、このことが、位相同型写像の幾何学的概念との混同ではなく同型写像あるいはその写像概念そのものに対する位相空間と同相といえる概念へと展開（ないし高揚）を齎すことになるのである<sup>(30)</sup>。

作用における連続性を維持しつつ、収束へ向かうにあたり、そこには  $X$  から  $Y$  に至る距離の一点一点における作用の位相同型が見いだされる。しかし上述したようにその高揚という変容があるとすれば、それは連続的変容という作用上の本質を保ちながらの位相的性質の存在がそこにある。そこにある本質の内容をわれわれは位相不変性向といえることができる。その連続は収束を繰り返しながら、究極までの収斂への道、無限内包的な収束の連続、あるいは無への収束を辿るという（仮説）論も存在する等々の、われわれのこれまでの議論がここでも再述されることになる。ユークリッド空間を超え出た思索においても、この連続ないし持続の議論は適用されうる、目に映じないまでもそこに位相不変性向が想定される限りにおいて、それは真とされる。目に映じなくとも連続があり、位相同性向を見いだすことができ、それは同相写像化されながら収束の道程を形作っていくことがあり得るのである。

この展開をわれわれがこの論において論題としてきた自我から人格への途における本質領域の議論に関する応用として考察していく作業をしておきたい。

ユークリッド空間において把握可能な自我領域が揺蕩（たゆたい）ないし試行錯誤の経緯を経て自我人格を維持し、さらに制度的存立を頂点とした社会的存立また共同性という相互的關係性の領

域における社会性をも維持して存立を可としていく。これが可視化できるわれわれの対象化可能な現実世界である。しかしこの現実世界を超え出た対象化できない世界までを視座に入れていかないと、われわれの研究領域として本稿で設定している福祉領域における問題状況への解明、解決へのアプローチさえなし得ないことについてこれまでの議論で詳述してきた。そこでわれわれが本質論の域で取り上げてきたのが、客体化できない世界、真の主体に関する考察であった。客体化をなし得ない真の主体として人格を位置づける。人間と世界の軸芯として人格主体を位置づけた議論をわれわれは取り上げ説いてきたのである。トポスの論理としてのトポロジー論に関する上述の論を経て、われわれはこの段階で人間存在と人間世界の営みの持続内で形態においては想定を越えて変形しながらも変わらない性向、すなわち連続的変形の状況内における位相的本質性向を見いだすことができる。その本質性向として人格主体を位置づけることができるのである。それは自我的人格という可視的かつ客体化をなし得る人格領域を経てその性向は主体としての人格へと連続していく。人格主体においては可視化できないのであるが、その主体としての性向は受け継がれていくことになる。さらにその性向は自我人格においては十全に発揮できないという状況であったとしても、連続性の彼方からの作用性向の働きを呼び起こしながら現在的存在に働きかけるときにそれは働き（作用）の本来性へと帰還することを可能とする。このように働きは絶えざる揺らぎを伴いながらも志向性というあり方を個的ないしは社会的に維持していくときに本質性向が顕現することになる。ここにわれわれが本質性向として位置づけるのは、これまでの論述から既に明らかであるように統合性という作用に他ならない。統合性が収斂の場にある人格主体の作用そのものである。

ここでわれわれは可視的世界と不可視の世界という一見次元の違いとも見える状況を連続させている、つまり同相としている軸芯という視点から、その内実確認をしておかねばならない。それは同相態として連続を可能としているその内容そのものに他ならず、われわれはこれまでの議論のなかでそれを作用として把握してきた。いうなればそこには作用連続があるという前提が敷かれていたのである。この視点の保持によって同相の作用状況が理解されうるのである。そうしてわれわれはこの作用状況を「統合作用」としてシェーラーの説くところに従い、ないしそれに即して理解してきた。またさらに段階的に個的存在における個的統合作用、社会的統合作用、秘奥的統合と理解を進めることのできる議論に触れてきた。このわれわれの個的存在におけるこの統合次元が、現実の福祉問題を担う人間存在の自我的な存在領域との関係性を、シェーラー流にいうと存在参与という形で、関係構成する、ないし、さらに詰めた表現を用いると何らかの接点としてあるのである。福祉領域では、自我次元におけるこの作用条件がわれわれの支援の技術、政策的・制度的条件設定といった領域の課題となっていくことになる。そこには個的志向性、社会的志向性さらに秘奥的志向性という意志的作用の連鎖が存在し、作用連鎖とその連続を支えていく。この志向性を持ち作用連続していく統合作用が人格であり、この人格は自我上の人格から人格主体という対象化できない領域まで人間における生命が持続する限り存続していく。

こうしてわれわれは志向性と統合作用連続という視座を思考の軸芯として前提とする限り、人間が生きる道筋における同相の一般的な広がり（空間的ともいえる）を可視的ならずとも想定することができるのである。現今、位相論、ことさら幾何学の手法を用いて、抽象における接続関係の性質や微小変形で普遍的である性質を扱うことが広くなされている。

特に近年においては、多くの分野において位相的考察の応用領域が拡大している。特に位相的場の理論あるいは位相不変量を計算する場の量子論は注目に値する<sup>(31)</sup>。

こうした幅広い応用範囲をも念頭に置きながら、さらに続けて、トポロジーの本質としてのトポス、さらにそこにおける連続の関係性を、ジョンストン, P. T. (Johnstone, P. T.) の Topos theory の関連部分の解題により、当該論理の自然科学的な展開に触れつつ考察の概要を取り上げることにする。ジョンストンのトポス論においては、アレクサンデル・グロタンディーク (Grothendieck, Alexander) のトポロジー概念に注視し、その功績が詳細にわたり分析されている。それは、グロタンディーク以前のトポロジー、例えばザリスキ (Zariski) トポロジーが十分な幾何学的概念を提供できるほどに開かれた集合とはいえなかった、という点に着目し、これに対して、グロタンディークの論は、相互形態論といえる概念を用いて、ザリスキの「開かれた包括論」に置き換え可能な論理的前進を図っている、として評価している。グロタンディークの論は任意の事柄に関する適応を可能にするトポロジー概念の提示といえるものであり、相互位相合同展開を可能にする概念枠設定のために「層 (sheaf)」の概念を一般化して用いている、という評価的な判断を下すことができる。

「層」のカテゴリーがかくして重要視されるのであるが、この見解のもとで、トポロジーのカテゴリーが一般化された位相幾何学的空間と見なされるようになり、トポスの名称が公理充足的な全てのカテゴリーに与えられることになった。この層のカテゴリー論は、われわれにとって連続の具体を示す諸種の手段的例示を与えてくれる<sup>(32)</sup>。それは著名な「マグカップとドーナツの例」を待つまでもなく、形状の異なりを越えた同相の相互性をわれわれに示してくれる。曲がりくねった連続でも相互同相が存在するという様相は、その連続の形態がわれわれの予想を越え出たところにあり得ることを示唆してくれる。人と人および人々が形作り、そこに前後において政策が絡まりという複雑な形状を呈する福祉の場（福祉形成ないし福祉の関係性の場）における位相合同ないし同相における、そこに内在する連続性にもこのような連続のなかに位相関係を発見できるという仮説設定が可能となる<sup>(33)</sup>。

ここでグロタンディークの言うトポスにおける相互同相についての基礎的定義づけについて整理をした形で記述しておく。

$\mathcal{E}$  をグロタンディークトポスとし、 $A$  を  $\mathcal{E}$  における交換可能な群とする。そこで、 $A$  における系数を有する  $\mathcal{E}$  の  $q$  番目の相互同相群は



$H^q(\mathcal{E}; A) = R^q(\gamma_*)(A)$  となる。そこにおいては、 $\gamma_*$  が  $\text{hom}_{\mathcal{E}}(1, \text{---}) : \text{ab}(\mathcal{E}) \longrightarrow \text{ab}(\mathcal{A})$

すなわち、これが幾何学的形態  $\mathcal{E} \rightarrow \mathcal{A}$  の直接的イメージ (写像) となる。等しく、 $\text{Ext}_{\text{ab}(\mathcal{E})}^q(Z, A)$  と同じように  $H^q(\mathcal{E}; A)$  を描きだすことができる。ここでは  $Z$  が  $\mathcal{E}$  内の  $1$  によって一般化される自由に交換可能な群 (アーベル群) となるのである<sup>(34)</sup>。こうした定義を前提にすることにより、同等集合が成立する。相互に交換可能な群の存在可能性が明らかにされる。

このように、その一部ではあるが、例示的に示した位相論の展開は、矛盾的と見える状況内における連続の存在に光を与えてくれる。通徹の實際を、生きられてはじめて顕現するものとして理解してきたのであるが、その同相の状況は、仮説的と見える同相状態のなかに読み込まれて既に存在している。トポロジーの一層の深化を待つまでもなく、連続の顕現以前の矛盾的合一の堅固な存立予測がここに与えられており、これが場を構成する重要な支えともみえてくるのである。

われわれは、以上のように社会福祉ないし福祉の場を連続性のもとに説いてきたのであるが、総じていうと福祉の場はこのような前方に向かって開かれた、かつまた試行錯誤をも伴いながらの一点一点に意味を持って開かれているという性向を持つといえる。

このようにして自我から始まる主体化の道を辿ることによって位相的なプロセスがそこには開かれて存立しているということが人間存在の現実のなかで明らかにされるのである。さらにその途ないし道程は人格という統合作用を前提にしていくことによって人間存在の全体性において可能となる、ということを知ることができる。人格存在の統合性という作用特性が論理上の本質を的確に表現し、位相的連続プロセスの条件設定となっていることが明瞭になるのである。その方向性は自我から人格へ、またさらに自我上の相互包摂から人格間の相互包摂への道の具体化へ、相互包摂の関係性を持続させながら、自我上の人格間、さらに対象化をなし得ない見えない人格間の相互包摂、さらに世界との相互包摂へと広がりを見せる。

こうしたプロセスは、福祉実践上の場の作用展開におけるまさに現実において検証されうる。ワーカー・クライアント関係に例を採ってみるまでもなく、生活問題を担う人における人格性を前提とせずして、クライアントの内発的な応答を呼び起こすことは困難である。自我上の人格状況にいかんに深刻な困難を保持していようと、人格に対するワーカーによる作用導出 (それはあくまでも操作ではない)、すなわちそれを前提にした働きかけがあってはじめて、クライアントの人格的作用が表出されていくことになる。ここに志向性がワーカー・クライアント関係という相互性をもって形作られていく。それは自我領域に始まっていくとしても人格主体の統合性の作用化を待たずしては表出されることがない。位相的な連続性が、自我から人格へと対象化を待たずして、むしろ対

象化を経由しないが故に顕現していく様をここに見い出すことができるのである。クライアントは、その困難な生活状況のなかにあったとしても、自我と人格主体の相互連関を経て、困難を抱える自我状況を統合的人格主体のもとにあって志向の道を歩みだす可能性を与えられていく。

以上のような考察を経て、さらに、次章における間主観の段階性に関する論理的展開を図るときに、より一層その困難克服の途が明確にされることになる。それにより、福祉プロセスがより具体的に表現されていくことになる。

この章における位相的連続性をも含めた考察を基礎におきながら、次章において、一層の福祉上の具体論をさらに参照しながら、われわれの議論の正当性を明確にする作業をしていきたい。その段階的考察を経ることにより、まさにその具体のなかで自我から人格へないし自我論的に主体と見えたものから人格領域における主体という真の主体へ至る、またその両者の相互の関係性の存立により、両者が見える領域と見えざる領域の断絶を越えて連続している人間の本質的な関係性の流れが明らかにされていくことになろう。

#### 注

- (1) 牛津信忠「社会福祉における相互的人格主義Ⅰ」久美出版、2008年、59-62頁。
- (2) 飯島宗享・小倉志祥・吉沢伝三郎編、青木茂・小林茂訳「同情の本質と諸形式」(シェーラー著作集8)白水社、2002年、p. 134.
- (3) 同書、pp137-138.
- (4) 同書、pp. 174-178.
- (5) 同書、pp. 180-181.
- (6) 同書、p. 182.
- (7) 同書、pp. 183-184.
- (8) 同書、pp. 185-186.
- (9) 飯島宗享・小倉志祥・吉沢伝三郎編、吉沢伝三郎・岡田紀子訳、「倫理学における形式主義と実質的価値論理学(中)」(シェーラー著作集2)白水社、2002年、p. 290.
- (10) 同書、pp290-291.
- (11) 牛津信忠「社会福祉における場の究明：共感共同からトポスへ至る現象学的考察」、2012年、丸善プラネット、pp. 21-22.
- (12) 同書、pp. 21-22.
- (13) 同書、pp. 34-35.
- (14) 前掲「社会福祉における相互的人格主義Ⅰ」70-71頁。および同書62頁。
- (15) 上掲、「社会福祉における場の究明」11頁および13頁。
- (16) 「場所」西田幾多郎全集第四卷、岩波書店、1965年、267、271頁。
- (17) 前掲、「社会福祉における場の究明」、78-79頁。
- (18) Vai'tkus, Steven, How is Society Possible? Intersubjectivity and Fiduciary Attitude as Problems of Social Group in Mead, Gurwitsch and Schutz, Kluwer Academic, 1991, pp. 54-55.
- (19) ibid., p. 84.
- (20) Firby, P. A., Surface Topology, Ellis Horwood Limited, 1982, p. 11.
- (21) Schubert, Horst, Topology, (transrated from the German by Siegfried Marman), Macdonald 1968, p. 13.

- (22) *ibid.*, p. 13.
- (23) *ibid.*, (1.3 Open Sets) の箇所述べている。
- (24) *ibid.*, p. 16.
- (25) *ibid.*, p. 17.
- (26) *ibid.*, p. 18.
- (27) *ibid.*, pp. 20-21.
- (28) *ibid.*, p. 22.
- (29) *ibid.*, p. 23.
- (30) *ibid.*, p. 24.
- (31) その他, トポロジーに関連する諸理論の応用領域はきわめて多方面にわたる。物理学においては, 宇宙論 (cosmology) の領域, また素粒子の領域等における展開が顕著である。物質科学における分子構造論。生命科学における分子の形状や機能に関する領域。情報科学においては意味論の展開における層の利用に関する領域。経済現象分析においても, その応用範囲は広がってきている。
- (32) Johnstone, P. T., *Topos Theory*, Academic Press, 1977, xi, xii.
- (33) ここにジョンストン, P. T. が提示するトポス論におけるアレクサンドル・グロタンディークに関する定義上の理解を特にコホモロジー理解に集約して述べている。それはトポスのコホモロジー理論ないしグロタンディーク・トポスといわれる。
- (34) *ibid.*, p. 261.

Phenomenological Reconsideration from Ego Theory  
to Personal Identity Theory :  
Enhancement Consideration Hinging on View of Social Welfare Part III (1)

Nobutada USHIZU

**Abstract**

---

Scheler. M. states in delineating the essence of empathy, that “empathetic feeling becomes a base of human love, and human love comes to an uncological love for personality and God”. This recognition expresses his thought, which results from the view of ego empathy theory leading to personality theory, well. I will advance by making Scheler’s recognition the axial center of our study. By doing so, in this third part of our study, we will search for the development of mutual inclusion which starts from topos formation through empathy for topos formation in the personal dimension. This study also intends to elucidate the route toward true “World Patency”. Development of this argument will substantiate our theory, based on “Formalism” by Scheler, to which we will refer repeatedly. In particular, I will seek to verify in more detail the study of the theory of value and the problems of the “Happiness Principle” in Scheler’s “Formalism”. Through such verification, we can clarify the development of mutual inclusion and intentional consciousness in individuals and in society, which involves schismatic (or paradoxical) identity. Such routes, based on the domain of social welfare (in a broad sense), will be elucidated in this paper, chiefly through logical development, as places of concrete topos formation.

---

**Key words;** ego, personal identity, intentionality, continuity, topology